

### 「三撚りの糸」

2005.7.3 赤羽聖書教会主日礼拝説教

9. ふたりはひとりよりもまさっている。

ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。

10. どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。

倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。

11. また、ふたりがいっしょに寝ると暖かいが、ひとりでは、どうして暖かくなるう。

12. もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。

三つ撚りの糸は簡単には切れない。

1. 私は再び、日の下で行なわれるいっさいのしいたげを見た。

見よ、しいたげられている者の涙を。

彼らには慰める者がいない。

**しいたげる者が権力をふるう。**

しかし、彼らには慰める者がいない。

2. 私は、まだいのちがあって生きながらえている人よりは、すでに死んだ死人のほうに祝いを申し述べる。

3. また、この両者よりもっと良いのは、今までに存在しなかった者、日の下で行なわれる悪いわざを見なかった者だ。

4. 私はまた、**あらゆる労苦とあらゆる仕事の成功**を見た。

それは人間同士のねたみにすぎない。

これもまた、むなしく、風を追うようなものだ。

5. 愚かな者は、手をこまねいて、自分の肉を食べる。

6. 片手に安楽を満たすことは、両手に労苦を満たして風を追うのにまさる。

(静けさ、安らぎ、休み) : 社会的成功を追求して苦勞するより、平安に、喜んで生きることが重要。

「もっと大きく、もっと強く、もっと偉く」と、成功至上主義より、主にある平安と喜びが何より大切。

7. 私は再び、日の下にむなしさのあるのを見た。

8. ひとりぼっちで、 (=親兄弟と死に別れた天涯孤独の人のことではない。

仲間もなく、 権力・成功・富を求めて飽くことなき者が、仲間も家族も捨ててひたすら成功を追求した結果)

子も兄弟もない人がいる。

それでも彼のいっさいの労苦には終わりがなく、彼の目は**富を求めて飽き足ることがない。**

そして、「私はだれのために苦勞し、楽しみもなくて自分を犠牲にしているのか。」とも言わない。

これもまた、むなしく、つらい仕事だ。

## 説教

伝道者の書を書いたのはソロモン王です。彼は、四章で、「権力」（1-3 節）、社会的「成功」（4-6 節）、「富」（7-8 節）の空しさを解説します。イエスさまがソロモン王のことを「栄華を極めたソロモン」とお呼びになった通り、ソロモン王は、金と力と成功を手にしたことでその黄金伝説が後々までも語り伝えられるほどに、まさに伝説的な人物でした。そして、金と力と成功を余りあるほど手にした上で、しかしこれらがいかに空しいものであるかを、実感込めて解説しているのです。

それによると、

- ・「権力者」は、自分以外の人間を暴力と力で「虐げる」対象としか見ていないために孤独だと言います。（1-3 節）
- ・社会的な「成功」を追求する者は、人々との闘争に明け暮れているために、苦労ばかりで平安も休息もありません。（4-6 節）

そして、

・「富を求めて飽き足りることがない」者は、8 節に「ひとりぼっち」だとありますが、これは何も親兄弟と死に別れて「ひとりぼっち」という意味ではありません。そうではなく、別に親兄弟と死に別れたわけではないけれど、親兄弟はいるけれども、しかし、その人が、自分の「仲間」も、「子も、兄弟も」、家族も捨てて、まさしく一心不乱に飽くなき富の追求に明け暮れているために、天涯孤独の「ひとりぼっち」だと言うのでした。（7-8 節）そして、さらに、金と力と成功に心がすっかり奪われてしまっているために、「『私は何のためにこんなに骨折って労苦し、楽しみもなく自分を犠牲にしているのか。』とも言わない」と言います。

そして、これらを評して、2, 3 節を見ると、「死んだ方がましだ」と言います。4 節を見ると、「風を追うような（つまり、風をどんなに追いかけても何も得られない）」空しさだと言います。そして、8 節を見ると、「（「空しい」は「ヘベル」で）「息の如き（つまり実態のない、中身のない）空しさ」だと言うのでした。

それでは、人生に於いて、「空し」くない、価値あることとは何だとソロモンは言うのでしょうか。それが、ひとりよりもふたりの人生です。「仲間」のいる人生です。「倒れても起こす者」のいる人生です。一緒に寝て暖めてくれる者のいる人生です。自分と一緒に戦ってくれる者のいる人生です。人を、自分の自己実現の手段と見るのではなく、踏み倒すべき敵と見るのでもない、人を人と思わぬ人生ではなくて、人を大切に作る人生です。人を愛し、自分も愛される人生です。愛し、愛される人生こそが、空しくない、本当に中身のある、貴重な、価値ある人生だとソロモンは言うのでした。

9 節を見ると、「ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。」とあります。ここでの「ふたり」の意味は、必ずしも夫婦のことを指しているのではないと思いますが、夫婦のことを指しているにせよ、あるいは、他のこと、例えば教会などの交わりを指しているにせよ、いずれにしても、ソロモンの言いたいことは、ひとかどの人物を目指し、立身出世を志して、もっと豊かに、もっと強く、もっと有名に、もっと大きく、もっと偉くという具合に、上へ上へと上り詰めていこうとするあまり、結局は人を人と思わず生きて、ひとりぼっちになってしまうような生き方ではなく、「人との関わりの中で生きる」生き方が大切だということが言いたいのです。それで、9 節では、「ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。」と、「ふたりが労苦することでより良い報酬が期待できる」と言います。

それでは、ふたりが労苦することで得られると言う、その「より良い報い」とは具体的に何を意味するのでしょうか。それが、10 節から 12 節で具体的に挙げられている三つのことです。原文では「もし～すれば、こうなる～」という言い方で、三つ挙げられております。

その一つは、私たちが倒れた時に起こしてくれることだと言います。

**「というのは、もしも彼らが倒れると、ひとりがその仲間を起こすからだ。**

**倒れても起こしてくれる者が誰もいないひとりぼっちの人は、ああ（不幸だ、災いだ）！」**（10 節直訳）

私たちは、誰ひとり、つまづかない人はいません。どんなに偉い人でも、順風満帆な人生だけを送れるわけではありません。挫折します。思わぬ災難に遭います。失敗します。過ちを犯します。そのような時、もし私たちに伴侶や仲間がいなければ、誰も助けてくれません。ヘブル語で「親友」のことを「イーシュ・シャローム（『平和の人』の意味）」と言います。誰かが苦しみ悩む時、その人を助け、慰め、励まして、平安をもたらしてくれる、あるいは、その人が罪に陥った時に、その人が罪の故に神のさばきを受けて滅びないようにその人を教え諭す、そうやって、その人が神さまに喜ばれ、神さまの祝福を受けて生活できるよう助けて「平和」をもたらす、それがユダヤ人の考える「親友」なのです。ソロモンは箴言の中でこう言いました。

**「友はどんなときにも愛するものだ。兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。」**（箴言 17:17）

苦しい時こそ真価が問われます。順調な時は、誰でもチャホヤしてくれます。泥棒だって擦り寄ってくるんです。世の人は、みんな、金と力と成功に群がって来ます。でも、それは本当の友ではありません。本当の兄弟でもありません。本当の伴侶とも言えません。本当の友と言えるのは、その人が苦難を味わった時に助けてくれる人です。その人が困っている時に、その人を見捨てることなく、助けてくれる人です。それが、本物の友です。「健やかな時も、病む時も、留める時も、貧しき時も、」いのちの日の限り、これを愛し、敬い、慰め、助けるのが真の伴侶です。都合の良い時は愛してあげるけれども、都合が悪くなると見捨てるというのは、真の伴侶でも友でもありません。「どんなときにも愛する」「苦しみを分け合う」「倒れたら、起こしてあげる」、それが真の伴侶です。真の友です。

**「というのは、もしも彼らが倒れると、ひとりがその仲間を起こすからだ。**

**倒れても起こしてくれる者が誰もいないひとりぼっちの人は、ああ（不幸だ、災いだ）！」**（10 節直訳）

苦しみを分かち合う伴侶、あるいは苦しみを分かち合ってくれる友がいる者は幸いです。そうではなく、

**「倒れても起こしてくれる者が誰もいない、ひとりぼっちの人は、ああ不幸です！災いです！」**

どんなに巨万の富を築き上げても、どんなに多くの部下を従えても、どんなに大きな成功を手にしても、しかし、自分が病気になった時、事業に失敗した時、罪を犯して刑務所に入れられた時、私たちが心から心配して、「起こしてくれる者」がいるでしょうか？ いれば、それは幸いです。しかし、「**倒れても起こしてくれる者が誰もいない**」とするならば、それはソロモンの言う通り、本当に「**不幸です！災いです！**」結局、その人は、「金の切れ目が縁の切れ目」というような隣人関係しか築いてこなかったからです。金と成功と権力を追求する人生しか生きてこなかったからです。だから、当然の報いと言えます。その人自身が、倒れた人を起こしてあげる生き方をしてこなかったからです。いろいろと周りに人がたくさんいても、結局その人たちはその人の金と権力と成功に群がっていただけでありまして、それが無くなれば、「はい、さよなら！」でいとも簡単に見捨てていなくなってしまう、これは本当に「空しい」ことです。だから、不幸ということも、神さまの賜物だと思えます。私たちは、貧しさ、病、失敗、挫折といった、不幸なことがどうしてこうも起きるのかと思えます。しかし、それも、私たちの思いをはるかに超えた、神さまの恵みだと思えます。それを通して、本物の友情、愛情に目が開かれるからです。錬られて、こされて、清められて、精錬されて、余計な物が取り除かれて、本物が残るのです。純粋な物が残ります。純粋な友情が残ります。純粋な愛情が残ります。純粋な絆が残るのです。そういうも

のは、苦しみを通してでなければ、決してわからないものだと思います。金や力や成功に取り巻かれながらでは、決してわからないものです。挫折してこそ、わかります。貧しくなってこそ、わかります。病んでこそ、わかるのです。倒れてこそ、わかるのです。

ふたりが労苦することで得られると言う、その「より良い報い」の事例二つ目は、冷え切った体温を暖めてくれるからだと言います。

**「また、ふたりがいっしょに寝ると暖かいが、ひとりではどうして暖かくなるう。」(11)**

パレスチナの昼は暑いが、夜は冷え込みます。旅人の人生を生きる私たちの冷え切ったからだを暖めてくれる伴侶がいることは、何にも代え難い恵みです。私たちのからだの熱を共に分かち合い、今の体温以上に熱くしてくれるのは、自分の伴侶です。共に重荷を分かち合うのみならず、共にヴィジョンを共有し、共に励まし合って、志を暖めていく同労者がいることは、私たちの人生の大きな力です。16世紀宗教改革者マルティン・ブツァーは言いました。

**「さて、結婚の本来の目的、究極の目的は、性交とか、子供をもうけることではありません。**

**と申しますのは、もしそうであるとすれば、**

**ヨセフとマリヤの間には真の婚姻はなかったことになりまし、多くの聖徒たちの間にもそれはなかったことになるからです。**

**そうではなくて、**

**結婚の究極的な、本来的な主目的は、**

**心からの善意と愛とを注ぎ出して、**

**神に対する務めであれ、人間に対する務めであれ、一切の務めを互いに分かち合うことであります。」**

私たちには、仲間が必要です。ヴィジョンを共有し合う仲間、共に同じ夢を見る仲間が必要です。それは、ひとりよりも、ふたりが、より有効です。それで、神さまは、

**「人がひとりでいるのは良くない。**

**わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」**

と、男の「助け手」として、女を造られたのでした。それは、共にヴィジョンを共有し、共に重荷を分かち合い、共に神のわざをなして、共に神と人々に仕えるためです。上には神さまがおられ、下には支配すべき被造物が数限りなく地を満たしています。やるべきことがたくさんあります。黙っていたら、疲れてどんどんと体温が下がっていくんです。やる気も失われていくんです。重圧に耐えかねて、プレッシャーに負けてしまって、働き過ぎで「鬱」になっていくんです。そうした中、神さまから委ねられた使命を、共に分かち合って、共に神さまに仕えていく伴侶として、助け手なる女を男にお与えになりました。それは、共に生きるためです。共に神さまに仕えるためです。この、「共に」というところに、心温まるものがあるのです。「共に」というところに、心熱くなるものがあるんです。

私は、牧師として奉仕してみても、最もやる気をなくす状況は、「ヴィジョンを共有してくれる人がいない」ということだと思います。勿論、私は牧師として、自分が神さまから教えられたことを、たとえ教団の、あるいは教会の誰ひとり私に賛成する者がいないとしても、忍耐を持って、ひたすら祈りつつ、地道に、コツコツと、誰に何と言われようともなしていただくだけですが、しかし、それが何年も、何十年も続くと、さすがに「鬱」的な状態になっていくと思います。でも、そこに、一人、二人と、「ヴィジョンを共有してくれる人」が出てくるならば、心温まり、心熱くなって、「よし、やるぞ!」とやる気が二倍、三倍、四倍、勇気百倍と増大してい

くのです。

「良い報い」の例の三つ目は、「もしひとりなら打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる」(12)ということです。「立ち向かえる」と訳される言葉の意味は「立つ、しっかりと立ち続ける、維持する、断固として抵抗する」といった意味です。強敵に直面しても、大きな困難に直面しても、たとえ悪魔の猛攻撃を受けたとしても、自分ひとりではそれになかなかなくても、自分と共に戦ってくれる伴侶がいるならば、あらゆる困難を耐え忍んで立ち続けることができます。悪魔の誘惑・猛攻撃にも断固として立ち向かい、抵抗して、世界の祝福の基たることができるというわけです。

#### 牧師夫人の役割について

よく牧師の就任式の際などに、「牧師先生を助け、」とか、「牧師先生によく仕えて、」という忠告を信徒たちにする人がいます。でも、私は、牧師を助けたり、牧師によく仕える必要はないと思います。そうではなく、むしろ私が言いたいのは、「牧師を助けてくれないから、共に戦ってくれ。」ということです。「同じヴィジョンを共有し、同じ心、同じ思いで、私と一緒に戦ってくれ。主のために戦ってくれ。」ということです。「三つ摺りの糸は、すぐに切られることがない。」(12節直訳)ここで最後に確認しておきたいことは、倒れたら起こす、共に寝て暖め合う、共に戦う、というこれら三つのことが、ソロモンの考える「良い報い」だということです。

真の喜び、真のすばらしさというものは、金や力や成功にはない、世の人が求める金や力や成功、そこには何も無い、空しさしかない、本当の人生の報い、良い報い、価値あること、人生のすばらしさは、倒れたら起こす、共に寝て暖め合う、共に戦う、というこれら三つのことにあると言うのです。いろいろと迷惑な事があっても、面倒なことがあっても、トラブルがあっても、重い患いがあっても、仲間がいなければ、家族がいなければ、こんな寂しいことはありません。倒れたら起こす、共に寝て暖め合う、共に戦う、共に主のために戦うという、人の交わり、互いに愛し合いながら共に神さまに仕えるところに、本当に価値あることがあるのです。互いに助け合い、励まし合いながら、神と人に仕えて神の栄光をあらわすところに、人生のすばらしさがあるんです。

これが夫婦の交わりです。これが家族の交わりです。教会の交わりの意味です。神さまから愛されている喜びを共に分かち合い、神の栄光をあらわす、家族の交わり、教会の交わりを築いていかれるよう、主の御名により祈ります。